シャンティ国際ボランティア会

研修報告書

桜美林大学　国際学部国際学科　3 年
杉本　文恵

研修期間;7 月 30～8 月 24 日(4週間)

写真;スラムにて

はじめに

大学で国際協力を学んでいたのだが、知識を得るだけの学びに飽きていた。もちろんそれも重要なのだけれども、知識を本当に理解する為には、実践が必要だと感じていた。これまでにも、海外で暮らした経験や、スタディーツアーへの参加、観光などで途上国を訪れた事はあったが、調査・研究というような目的のために行ったことはなかった。大学で学んだ事を生かすため、実践を行おうと、SVA 海外研修プログラムに参加を決めた。

なぜカンボジアを選んだのかというと、もともとカンボジアが好きだった、というのが一番の理由である。もっとカンボジアのことを知りたい、カンボジアに1ヶ月滞在してみたい、と思った。この選択は正解であったし、研修を終えた今、あの頃よりも一層カンボジアを好きになった自分がいる。

研修中、楽しいこと、つらいこと、悩んだこと、などなど、多くのことを思ったし、多くのことを経験した。それら全てを記することは不可能であるし、それほどまでに記憶が確かなわけでもない。研修中に感じたことや得たことの、ほんの一部であるが、こうして報告書としてまとめたいと思う。

目次

はじめに

第一章　研修内容
1. 1週目：文化復興支援事業――バッタンバン
2. 2週目：学校建設事業――コンポントム
3. 3週目：スラム事業――プノンペン
4. 4週目：図書館事業――バンテミンチェイ，シェムリアップ

第二章　調査
1. テーマと目的
2. 方法
3. スラム
4. 農村部

第三章　まとめと反省
1. 調査結果
2. 調査反省
3. 今後の展望

おわりに

タランチュラ売り

第一章 研修内容

1. 1週目：文化支援事業――バッタンバン

バッタンバンでは、寺院を多く回った。目的としては、僧侶による開発が行われているのか、文化保存状態はどうか、などの調査のためである。カンボジアの寺院といえば、アンコール遺跡群が有名であり、私も訪れたことがあるが、そんな観光とは無縁の、今でも僧侶らが暮らす寺院である。

寺院といってもいろいろで、開発に積極的な寺院や、そうでない寺院、内戦中に破壊された箇所が生々しく残る寺院など、興味深いことが多かった。アンコール遺跡群を見るのも悪くないが、こういった名も知れない「生きた」寺院をみることも重要であると感じたし、カンボジアを知る上で、それは必要なことであると思う。

バッタンバンでは、寺院のみでなく、2 箇所の孤児院を訪問することも出来た。

バッタンバンの寺院

2. 2 週目：学校建設事業――コンポントム

コンポントムでは、学校建設の現場を訪問した。SVA の方針として、学校は、最も必要とされている場所、僻地に建設する。僻地への道は舗装されておらず、されていたとしてもあまり快適とはいえない。そんな状況に加え、研修中、カンボジアは雨季である。上下左右に揺らされ、さらに雨が降る。

途中、道が陥没し、なくなったことがあった。しかし、届けなくてはならないもの、やらなくてはなら事がある。そのときは、地元住民の助けにより、小船を出して水の上を渡ったが、予定されていた、私のインタビュー、およびアンケート調査は行えなかった。

しかし、このことによって、予想される状況全てを想定し、想定されない事態が生じたとしても、それに上手く対応することの必要性を認識することが出来た。

なくなった道路

3. 3 週目：スラム教育文化支援事業――プノンペン

スラム教育文化支援事業が行う、移動図書館に参加させていただき、スラムを訪問させていただいた。カンボジアのスラムに入ることそれ自体始めての経験であったし、移動図書館活動を見るのも始めてであった。

図書館の姿を見ると、すぐに駆け寄ってくる子ども達や、熱心に本を読む姿を見ると、いかに絵本という心の栄養が重要であるか、理解することが出来た。

スラムではインタビュー、およびアンケートを行うことが出来た。インタビューやアンケートを行うのは、私にとって始めての経験であり、非常に良い経験が出来たと思う。

4. 4 週目：図書館活動――バンテミンチェイ，シェムリアップ

以前プロジェクトを行っていた、バンテミンチェイにおけるモデル図書館を観察し、シェムリアップ事務所に訪問する JICA スタディーツアーのアテンドを行った。

バンテミンチェイでは、夏休みにもかかわらず、多くの子ども達が図書館へ来ており、子どもたちの図書館に対する意識を垣間見たような気がした。また、インタビュー、およびアンケート調査を行うことが出来た。

バンテミンチェイへ行く途中で、キリング・フィールドへ立ち寄った。まだ骨などの発掘が行われておらず、当時の状態のままであった。そこかしこに骨や衣服などがあり、非常に印象的であった。

シェムリアップでは、アテンドと言っても、私たち研修生が行うことは水出しなどである。しかし、この経験により、いかに訪問者が大事であるか、またアテンドをすることがいかに大変な事であるか、理解することが出来た。

音楽を楽しむスラムの子ども

第二章 調査

1. テーマと目的

私がこの研修を通して、調査しようとしたテーマは、『都市スラム、および農村地域における、教育・子どもの労働に対する意識調査』である。

プノンペンでは多くの子どもが働いているが、そのほとんどがスラムの住民である。児童労働は子どもの教育機会を奪い、子ども時代を奪うものであるから、反対されるべきであり、その撤廃のためには、教育の普及が重要であると考える。スラム住民のほとんどは地方農村部から異動してきた人々であるから、児童労働をなくすためには、農村住民に対するアプローチも必要不可欠である。

両者の意識の違いを明らかにすることにより、児童労働と教育はどのような関係にあるのか概観しようと考え、このようなテーマにした。

2. 方法

方法は、前述の通り、インタビュー、およびアンケートである。

インタビュー、およびアンケート票は、まず、英語で作成した質問表、および回答をスタッフにチェックしていただき、手を加える。そして、完成したものをクメール語訳してもらう、という方法で作成した。回答を予め用意することにより、回答者が回答しやすいようにした。

この作業の過程で、初め私が英語で作成したものをスタッフに見せると、私が想像していなかったような回答や、新たな質問を提示してくださり、現場を知る人の視点というものの重要性を改めて実感した。

こうして、作成した票をもとに、スラム、および農村部(バンテミンチェイ)において、インタビュー、およびアンケートを実施した。

3. スラム

質問内容は下記の通りである。

【対象:子ども】

(1) 年はいくつか
(2) 出身はどこか
(3) 学校へ通っているか
　　はい(→3.1)　　いいえ
(3.1) 公立学校(パブリック・スクール)か
(4) 仕事をしているか
　　はい(→4.1, 4.2)　いいえ(→4.3)
(4.1) どんな種類の仕事か
(4.2) 仕事は好きか
(4. 3) (現在)働きたいか
　　はい　　いいえ(→4. 3.1)
(4. 3.1) なぜか
(5) 故郷で働きたいか
　　はい　　いいえ
(6) あなたにとって教育は大事か
　　はい　　いいえ
(7) 将来何になりたいか
　　先生　　医者
　　会社員　　工場労働者
　　海外へ出稼ぎ
(8) 本を読むのは好きか
　　はい　　いいえ

インタビュー(スラムにて)

インタビュー(バンテミンチェイにて)

【対象:親】

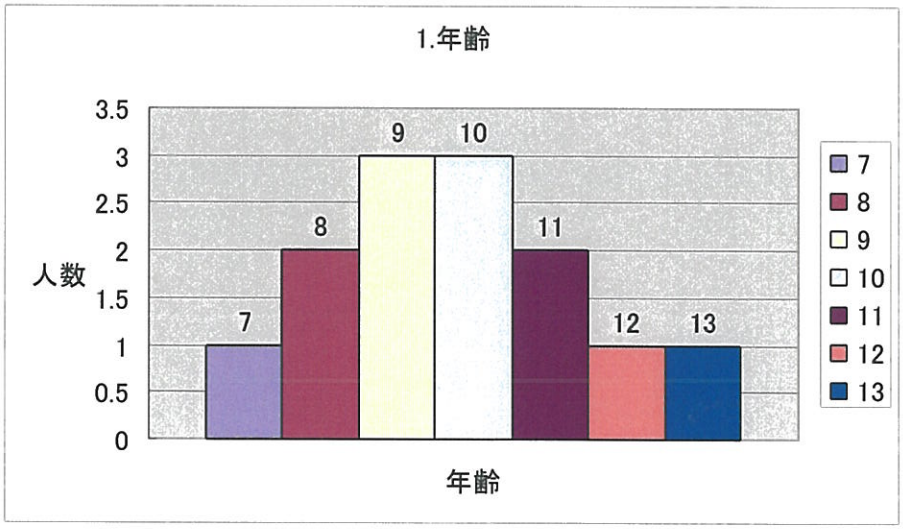
(1) 出身はどこか
(2) 教育を受けたか
　　はい　　いいえ(→2.1)

(3) 子どもは学校へ通っているか
はい(→3.1)　　いいえ(→3.2,3.3)
(3.1) 学校へ通うことによる良い影響は何か
読み書き能力がえ得られる　　友人が出来る
道徳を学ぶ
(3.2) 学校へ通うことによる悪い影響は何か
お金がかかる　　悪い友人が出来ない
家事が出来ないの
(3.3) 学校へ通わせることの難しさは何か
(4) あなたの子どもは働いているか
はい(→4.1,4.2)　　いいえ(→4.3)
(4.1) 働く事による良い影響は何か
(4.2) 働く事による悪い影響は何か
(4.3) 子どもを働かせたいか
はい　　いいえ
なぜならば…
(5) 子どもに教育は必要であると考えるか
なぜならば　高い能力を得られるから　良い仕事を得られるから
貧困から脱出できるから
(6) 教育は労働よりも重要であると考えるか
はい　　いいえ
(7) 故郷へ帰りたいか
はい　　いいえ
(8) あなたの仕事は何か

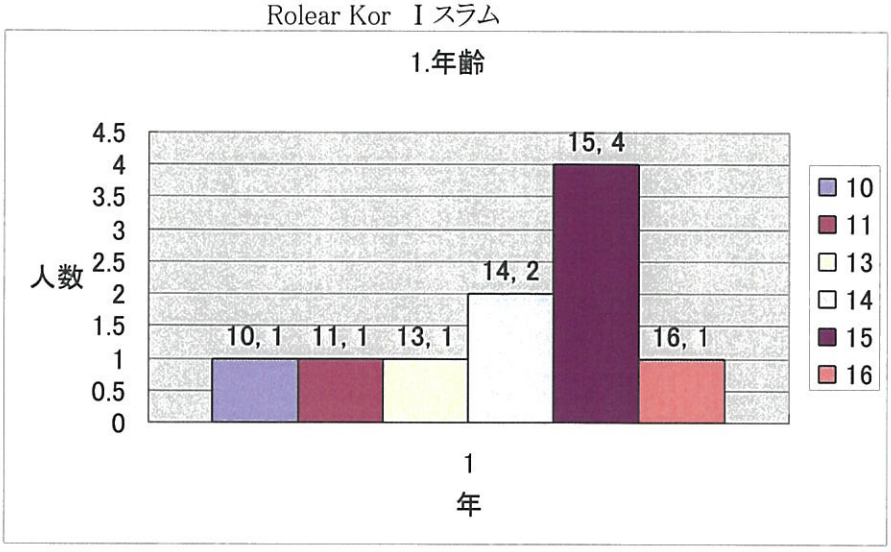
2 箇所のスラムにおいて、計 23 名の子ども、計 4 名の親に回答をいただくことが出来た。
移動図書館を行いながらの調査であったため、特に親は数が限られてしまったが、一人ひとりに直接インタビューすることが出来た。
インタビュー、およびアンケート集計結果は以下のようになる。

【子ども】
(1) 年はいくつか

Steung Meanchey スラム



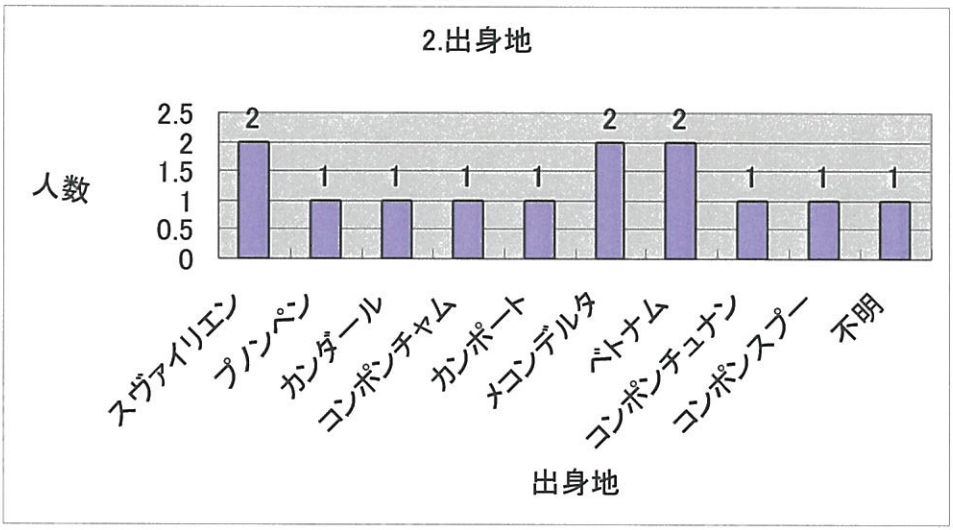
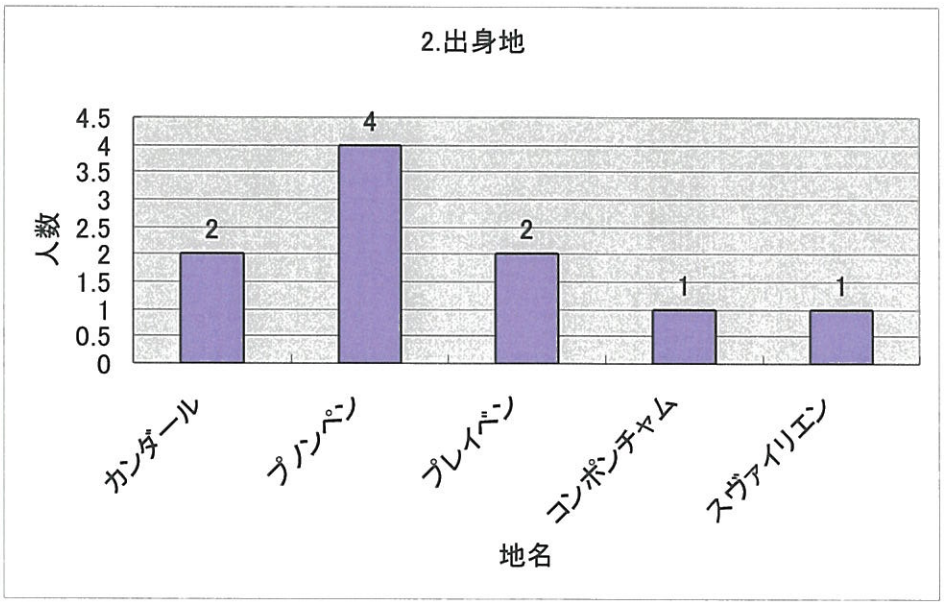
Rolear Kor　Ⅰスラム



Steung Meanchey スラムにおいては、9～10 歳が最も多く年齢層が低くなっており、Rolear Kor Ⅰスラムでは 15 歳が最も多く年齢層が高くなっている。いずれにしても、学齢期であり、労働可能な年齢であるといえる。

(2) 出身はどこか

Steung Meanchey スラム



Rolear Kor Ⅰスラム